
Angel Beats! + オリ主 ~Another story~

月下氷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Beats! + オリ主 ↗ Another story

「」

【Zコード】

N5639Y

【作者名】

月下氷人

【あらすじ】

記憶を失った主人公「氷室^{ひむろ}」は目が覚めると、そこは『死後の世界』であった。

そこで『死んだ世界戦線』のリーダー「ゆり」と出会い、無理矢理主人公「氷室」は入隊させられた。どうやら天使のことを聞いたりすると消されるらしい。消されないために今日も戦線メンバーは天使と戦うのであった。

これはオリ主介入+チート?です。苦手な方は戻るボタンを。ヒ

ロインはゆりっぺです。あと私はこれが人生初の小説投稿なので、あたたかい目で見てください。更新は不定期ですが、なるべく毎日投稿できるよう、頑張りたいと思います。

Episode 1 死後の世界（前書き）

どうも初めまして。月下氷人です。最近A B C見てどうしても小説を書きたくなつて、つい書いてしまいました。人生初の小説投稿なので、何卒よろしくお願ひします。

主人公 sides

「ん……？」

目が覚めると、俺の視界からきれいな夜空が広がっていた。
なんで俺はこんなところで寝てたのか。そもそもここがどこなのか。
わからないことだらけだった。

「あら、目が覚めたようね」

突然、声をかけられたから後ろを振り向くと、そこにいたのは、黒
のニーソックスを履いた、紫色の短髪の女の子がいた。

「えつと……どちらさま？」

「そういうのはまず、自分から名乗るもんじゃない？」

「まあ、それもそうだな。俺は氷室だ。下の名前は……。わからな
い。お前は」

「ゆりよ。みんなからひみつぺって呼ばれてるわ。まあ、呼ぶと
きは好きなよつこみんでくれればいいわよ。よしへね」

「ああ、まいじょ」

「つあえず簡単な自己紹介をした。あと何故スナイパー？を持つてこののかは気になるけど、つあえずスルーしといた。

「つあえず歩きましょ」

「ちよつと待てー。俺は聞きたい」とが「あ・る・せ・れ・じょ」

「…せー」

「まいじょ」

ゆつの言葉から殺意を感じたので、何も言ひ返すことが言えなかつた。

「えつと…。まいじょ行くんだ?」

「校庭」

何で校庭に行くのかわからなかつたけど、つあえず歩いて行くことにした。

少し歩いて、ゆうは俺に話しかけてきた。

「氷室君。唐突で悪いけど、入隊してくれないかしら？」

「入隊？」

「…………」とは氷室君、あなた死んだのよ

「What? 何言つてんだ?」いつ? 頭がおかしいんじゃないか。

「はあ? なに言つて?」は死後の世界よ。何もしなければ消されると

「消される? 誰に?」

「やつや あ神様でしょ」

もつときから何を言つてのかわからぬ。俺が死んだ?
? その時点でわけがわからない。俺は死んだ憶えがまったくない。というより自分の苗字以外何も思い出せない。

「じゃあ入隊つて?」

「死んでたまるか戦線によ」

「死んでたまるか戦線?」

「そう。まあ、要するに消されないために戦つていく組織よ。あ、ちなみにともとの組織名は死んだ世界戦線だつたけど、それだと死んだことになるんじゃね?ってこといろいろ改名してつた結果死んでたまるか戦線になつたのよ。あと新しい名前募集中よ」

「まあ名前はともかく、戦つつて何と?」

「天使よ、と噂をすれば

俺たちはいろいろと話しているうちに、校庭の近くの花壇についていた。校庭には銀髪のかわいらしい女の子がいた。

ゆりは携帯をポケットから出した。

「日向君。天使を発見したわ。場所は
校庭よ。大至急こちらに来て。あと新メンバーゲットよ

どうやら応援を呼んだらしい。

仮にここが死後の世界だとしても携帯は使えるんだな。

ゆりは携帯をポケットにしまい、あの子にさつきから持っていたスナイパー?を向けた。

「一応聞くけど、それ、本物?」

「あたりまえじゃない」

「何故女子に銃を向けている?」

「彼女が天使だからよ」

「本当に?」

「嘘ついて何になるつていうのよ」

「まあ、それもそうだけ?...」

でもイマイチ信用できない。どう見ても、見た目は普通の女子にしか見えない。

「誰が信用できな?」ですって!?」

あ、声に出でたか。

「女の子に銃を向ける奴が信用できるか!俺はあの女の子にお前の話が本当かどうか聞いてくる」

「はあー…それ本気で言つてるのー…？」

「ああ。 本気だ」

「あ、ちゅうと待ちなさいよ」

と言つて俺は女子の方に向かつた。

→ O-side

「ゆりっぺ。 今来たぞ」

「あら田向君。 来たわね

「で新入りさんばかり。」

「あそこよ」

ゆつは校庭の方を指をさした。

「何で天使のところにいんだよー…？」

「勧誘に失敗したわ…」

「何やつてるんだよ。 で、どうするへ。」

「まあ、とりあえず様子を見ましょ。 どうせ死ないし」

氷室 S.ride

俺はゆりの話が本当かどうか確かめるために銀髪の女の子のところへ行つた。

「ねえ、そこの君」

「？」

「なんか向こうにいるバカがお前のこと天使とか言ってたぞ」

「私は天使なんかじゃないわ」

「だよね～」

やつぱりそつだつた。こんな子が天使な訳がないよな。天使のよう
な可愛い子だけれど。

「じゃあんた何者?」

「私は生徒会長よ」

「やうか。じゃあもう一つ聞いていいか?」

「？」

「ハリセンゼンだ？」

「死後の世界よ」

あれ……。やつと回しの間に何がある……。

「は？ マジで？ ジャあ、証明してみろよー。」

「……ハンドソンコート」

女の子の左手首あたりから刃物が出てきた。
そして俺の心臓をめがけてその刃物で刺そうとしてきた。
俺はなんとかよけることが出来た。

「ちよ、あぶねーじゃねーか！！」

「あなたが証明しりと聞いたから」

「こきなりソウシツ」とやるか……。」

と言つてゐるうち、また女の子は俺に切りかかつってきた。
暫く俺はよけ続けた。しかし、俺よくよけ続けられてるなー。なん
だか体が軽い。動きもよめる。あー、でもだいぶよけることがだる

くなってきた。よし、もう諦めよう。ここが本当に死後の世界なら心臓を刺されても死ぬわけないだろ？ 多分…。

俺はわざと心臓を刺された。やべつ。思つたよりすげー痛い。そして俺は意識を失つた。

これから俺はどうなるのだろうか。

「なかなかやるじゃない、氷室君。あの天使と互角に殺りあつてしま

…」

Episode 1 死後の世界（後書き）

楽しんでいただけただどうか？

小説書くのなかなか難しい。

更新は不定期ですけどなるべく早く投稿できるようにしたいと思います。

Episode 2

死んだ世界戦線（前書き）

やつらがキャラ崩壊してくるような…

Episode 2 死んだ世界戦線

（氷室side）

「ん……」

目が覚めると、俺は上半身裸でベットで横になっていた。周りを見ると、どうやらここには保健室らしいな。外を見るともう暁くらいになっていた。

「あれ……？ 俺……」

あ。俺昨日あの女の子……いや天使に心臓を刺されたんだった。証拠に俺が着ていた学ランとワイヤーシャツが血まみれになっていた。やっぱり心臓貰かれても死んでない（この世界において）ということは、ここはやっぱここは死後の世界なのか。俺やっぱ死んだのか。生前の記憶全然ないけど。

もうつけよっと寝ようかなーと思った時、

ガラッ

「あら、起きたのね」

中に入ってきたのはゆりであった。

寝よつとゆつたの……

「ああ

「それにしても氷室君、なかなかやるわね

「何が？」

「昨日のことじよ。天使と互角に戦つてたじやない

「いや。なんかなんとなく相手の動きが読めて……」

「ふうん」

自分でも驚きだつた。俺は生前何をやつてたのだろうか。軍隊にも入つてたんじゃないのか？ …いやないか。

「それより俺は聞きたいことが」「あつこれ。戦線の制服だからあとで着替えといで

少しば俺の話を聞いてくれ…

俺はゆりからブレザーの制服を渡された。

俺はもう入隊する前提かよ。まあ、昨日のことじよがあつたからまあ、いいけど。

「んじゃ、今着替えるわ」

俺はベットから降りて、着ているズボンを脱ぎましたとき

「ちよつ―――」何女の子の前で堂々と脱いだところである。

1

と頬を赤くしながらゆりは俺に言つてきた。

「あ、いや。わりいー。お前を女だつて全然認識してなかつたら…

卷之三

ゆりは手首をポキポキしながら満遍な笑みをして言つてきた。ゆり
さん… マジで怖いですよ。

「ゆり。暴力はなしにしよう」

「死ね————！！！」

俺は顔面にパンチをおもいつきりくらった。ゆりは保健室を出てしまつた。マジでいてー。

「……。とりあえす着替えてこい」を出るか

俺は着替えて保健室を出た。

保健室を出たすぐ目の前にゆりがいた。
待つてくれたのか。

「あの……。やつは『メン

「……やつきのパンチでチャラでいいわよ。それより行きましょ

「どこの?

「私たちの本拠地へ

俺たちはゆりの言ひ本拠地へ向かった。

「さういえば昨日誰が俺のことを保健室に運んでくれたんだ?」

「私と日向君つて言つ人よ

「やつか。ありがとな、ゆり」

「えつ／＼／ 氷室君が素直にお礼を言つとは…」

「言つちや悪いかよ」

「いや、別に…／＼ 天使を欺くの大変だつたんだからね／＼！」

少し頬を赤くしながらゆつは言つた。

そつか。あとで田向つていう奴にもお礼を言わないとな。

（ゆり side）

もつ。あんな笑顔でお礼を言われて、ちょっとドキドキしちゃつた
じゃない。氷室君、けつこうかつこいいかも… って私なに考えて
るんだる。まあ、頼りにはなりそうね。

（氷室 side）

「えつと… ちょっと質問していいか？」

「あ、でもそろそろ着くか？」

「やつか」

まあ質問はあとででいいか。

「さあ、着いたわよ」

「つてここの校長室じゃないか」

「そうよ。そしてここが死んだ世界戦線の本拠地よ。天使の侵入を一度も許した事がないわ。ちなみに組織名を元に戻したわ」

「そうかい」

つていうかどんだけ名前にこだわっているんだよ…。

「とりあえず入るか」

「あ…。ちょっと待つ…」

「ん?」

俺がドアノブに触れた瞬間、巨大なハンマーが俺に両掛けでとんできた。

「ちゅつ。あぶねーじゃねーかー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!

なんとか自分の瞬発力でかわした。

「言ひの忘れてたけど、ドアに対天使用の罠がしかけてあるから」

卷之三

二〇四

「てへつ ジャねーよー！」
危うく吹っ飛ばされそうになつたじ
やねーかー！」

「いやー。『めん』『めん』。これには合言葉が必要なのよ。『神も仏も天使もなし』」「これでもう大丈夫よ」

「神も仏も天使もなしか」

俺はこの言葉を頭に刻み込んでおいた。

校長室に入ると俺とおんなじ制服を着た人達が何人かいた。

「おひ。」じいづが新入りか

長ドスを持った男が言つてきた。

「あの黙をかわすとは。凄いなー」

今度は青髪の男が言つてきた。

「彼が朝、私が言つた新人よ。名前は氷室君よ。とりあえず皆、一人ずつ自己紹介してつて」

「じゃあまず俺から。俺は日向だ。見たどおり俺はかっこよ...」「見たどおりちやらんぽらんな奴よ」つて全然フォローになつてないぞ！

「まあ、たまに頼りになる奴よ」

「ようしきくな、氷室」

「ああ、ようしき、日向。そういうえば、昨日保健室まで運んでくれてありがとう」

「いいつことだ。俺たちも仲間だろ。」

「そうだな」

「俺は松下だ。ようしきな。」

「ああ、よろしく」

「彼は柔道が五段だから敬意を込めて、みんなは松下五段と呼んでいるわ。」

「松下五段か…」

「僕は大山。えっと… 「特徴がないのが特徴よ」 さはは… よろしくね」

「ああ、よろしく」

「c o m e o n ~ l e t - s d a n c e !」

「いや。躍んねーよ」

「彼なりの挨拶よ。みんなはTKって呼んでいるわ。本名は誰も知らない謎の男よ。ちなみに彼、英語得意そうだけど実際のところ全然できないわ」

「やうか。よろしくな」

「N i c e t o m e t oo~」

「面白そうな奴ばかりだな～。」

「私は高松です。よろしく」

「よろしく」

「彼、頭良たそうだけどただの筋肉バカよ」

「そうなのか…」

「俺は藤巻だ。よろしくな。新人」

「ああ、よろしく」

「…………」

「えつと…」

「彼女は椎名さん。いつもあさはかなりいーと言っているわ。彼女は可愛いものに弱いわ」

「そうか」

「私は岩沢だ。よろしく」

「ああ、よろしく」

「彼女はガルデモのリーダー兼陽動部隊よ」

「ガルデモ?」

「ガールズ・デッド・モンスター。略してガルデモ。バンド名のことだ」

岩沢が言った。

「へえーバンドやつてんのか

「まあ、そのほかにも…」

ゆりが言おうとした瞬間、ドアがバンッと開いた。

「おい、新人！ ゆりっぺが認めたからって俺は認めていな…」

ハルバードを持った男が喋ってる途中、ハンマーが彼に当たり、飛んで行つた。

ああ… 犬が作動したんだな。

「自分で仕掛けた罠なのに…。アホだ」

田向が呆れて言った。

「さつき飛んで行つたバカは野田君よ

「そつか

「他にもメンバーは何十人かいるわ」

「へえー」

暫くみんなと話をした。

みんなとすぐに仲良くなるができた。まあ、納得してない奴約一名
いるが…。

「まあ、今日はもう解散でいいわ。別にもうやる事ないし…。あと
氷室君。あとで屋上へ来て。聞きたい事がたくさんあるんでしょ?」

「ああ

ゆりが解散と言ったからみんな何処かへ行ってしまった。

……俺も行くか。

俺は屋上へ行った。

みんな面白い奴だな。
なんだか楽しくなりそうだな。

Episode 2 死んだ世界戦線（後書き）

みんなどんなキャラなのか全然わからない…

主人公設定（前書き）

オリ主の設定です。
イメージを崩されたくない方は見ない方がいいかも…

主人公設定

若干ネタバレがあります

- ・名前 氷室 ひむろ
- ・身長 177cm (日向よりわずかに高い)
- ・体重 65kg
- ・髪型 ガンダムSEEDのキラ・ヤマトみたいな
- ・好きなこと (もの) 寝ること 100%アップルジュース
- 甘いもの からかうこと
- 嫌いなこと (もの) 特になし
- ・武器 主に日本刀
- ・顔 イケメン (本人自覚なし)

けつこうめんぢくさがり屋。けどやるときはやる。頭はかなりいい。

けど、アホ。
日本刀をもらつてからいつも背中に背負つている。少し鈍感。子供っぽい一面もある。男友達では日向と一番仲がいい。仲間思いである。

生前と下の名前はのちに明かすつもりです。

Episode 11 の世界について（前編）

タイトルキーですみません。

Episode 3　「Jの世界について」

（氷室s.i.d.e）

俺は今屋上へ向かっている。ゆりが屋上で話さうと言つたからである。

廊下を歩いていたら、掲示板にガルデモのポスターが貼つてあった。

「バンドか～。今度演奏聞いてみたいな」

「ねえ。このポスターみてるってことは、ガルデモに興味あるの？」

突如ピンク色の髪の女の子が俺に話しかけてきた。

「あなたその制服着てるってことは戦線のメンバー？」

「ああ。今日入ったばかりだ。」

「あなたが新人さんね。あたしユイっています。」

「俺は氷室」

「よろしくです。氷室先輩」

「ああ、よろしく」

先輩って言つてるからこいつ下級生か~。

「ところで先輩。ガルデモに興味あるのあるんですか?」

「まあ、少しば…」

「あたしガルデモの超ファンでアシスタントをしてるんですよ。もお～あたし岩沢さんのギターと歌が好きでー。特にCROW SOng が…」

こんな話が暫く続いた。

俺のポケットに入つてゐる携帯が鳴つた。

「それで…」

「悪いいコイ」

と言つて俺は携帯を取り出し、電話にでた。

「もしも…」「氷室君…いつまで待たせるのよ…」

「

「あ…。悪い。今すぐ行く

「10秒で来なさい

電話が切れた。ユイの話を聞いてたら、忘れてた…。ってか、いつの間に俺の番号知ったんだよ。俺にプライバシーはないのか…。

「悪い…、ユイ。今すぐ屋上へ来いとゆりが…」

「そうですか。わかりました。なんか呼び止めたりなんかしてすみませんでした」

「別にいいよ。ガルデモのことよくわかつたし」

「そうですか。じゃあ頑張ってください」

「おう。じゃあ

俺はダッシュで屋上へ向かった。
ゆりかなり怒ってるだろうなー。

俺はこの世界に来て一番のダッシュをした。

「はあーはあー

「おやーーい！… 一体なにしてたのよ

「ヨイって奴に捕まつてた。」

「全く…。まあいいわ。早速話をしましょ。でまず私から注意事項
が

「なんだ？」

「まず、授業や部活はまともに受け取てはダメよ。消える対象になる
から」

「わかった

「次に私たち以外の生徒…NPC^{ノンプレイヤーキャラクター}つていうんだけど、そいつらには
基本、手を出しちゃダメよ。あくまで私たちの標的は天使よ。それ
が私たちのポリシーよ」

「NPCって… あのゲームとかで一定の会話しかしない…」

「せうよ。例えて言つならばね。あいつらもとむじてゐる模範つて意味よ」

「じゃあ話しかけても一定の答えしか返りたくないのか？」

「そんなことないわ。最初は私たちと違いがわからなはずよ。なんだったらや二らへんの女の子にカンチヨードもしてみたら」

「やうか。じゃあ…」

俺はしゃがんで、両手をあわせ、人差し指を伸ばし、ゆうにカンチヨードしようとしました。

「ちよつと……何私にカンチヨーしようとしてるの……」

「お前がそこらへんの女の子にカンチヨーしてみればと言われたから

「人の話し聞いてた？　ＺＰＣの女に決まってるでしょ！…」

「そんな」とわかつてこる。ゆうに殴られっぱなしだったからな。その仕返しだ！！

ゆうは俺のことを蹴りたしたが、自分の瞬発力のおかげでかわすことができた。

「隙ありー！」

グサツ

「あんつ／＼／＼」

俺はスカートの上からカンチョーする」とに成功した。

「IJの… 変態が…」

俺はそのあとかなりボロボロされた」とは言つまでもない…

「……（IJの私がカンチョーされるとは…。一生の不覚だわ）」
「本当に悪かつたから～」

「……もういいわ。それで何か質問ある？」

「えっと…じゃあIJって天国？ 地獄？」

「さあ。でも少なくとも地獄にはこんな立派な学校あるとでも？」

「確かに……」

「ここに来る人間は大抵、自分の人生が納得していない人が来るところよ」

「そうなのか……。ゆりも生前にいろんなことがあったのか」

「そうね」

「よかつたら聞かせてくれないか、ゆりの生前。嫌なら別にいいけど……」

「……いいわ、教えてあげる」

俺はゆりの過去を知つた。

妹と弟を守れなかつたことに後悔しているらしい。

「そうか……。でもゆりって強いよなー。リーダーが務まつてる訳がわかつたよ」

「でも私は……」

「ゆりはなんも悪くねーよ。立派な姉だつたじやん」

「でも私はそんな人生にした神様を許さない。だから私は神様に抗つているの」

「セリフ…」

ゆりがあんな過去があるくらいだからみんなもそのくらいの過去があるのか。ってことは俺も……。

「じゃあ天使に従つたら消されるって書いてたけど、消されたらどうなる?」

「生まれ変わるんじゃない?まあ、生まれ変われても魂が人間に宿るとは限らないし。ミシン口とかになるかも」

「ハハハ…。えっとあと……武器つくれるの」

「ええ、せひうござよ。何か注文とかある?」

「じゃあ…日本刀」

「なんで日本刀?まあ、いいけど。一応鏡も準備するわ」

「すまねえ」

「他に質問は?」

「腹つて減る?」

「普通に減るわ」

「季節つてある?」

「あるにはあるわよ。ちなみに今は10円よ」

「シテる？」

「男子寮があるから後で田向君にでも案内してもらおう」

- なりのバストは? -

「……」で何言わせてるんじゃ

卷之三

また顔面を殴られた。まあ100%俺が悪いけど…。

「まったく…。最初会つた時は、普通の常識人だと思つたのに…。またしてもアホが入つてくるとは…」

「悪かつたな」

「で、もう質問は以上？」

一
おお

「それじゃあそろそろ晩御飯の時間だから食堂で一緒に食べましょ。はいこれ食券

「おっサンキュー……」この食券ライス（中）じゅん

「うひよ。私にセクハラ行為した罰」

「う…」

こうして俺の夕食はライスだなとなつた。
ライスだけじゃ足りなかつたので日向から肉つじんを分けてもらひ
た。

俺は食後日向と寮へ行き、眠かつたからすぐて寝た。

なんだかめっちゃ疲れた…

Episode 1Jの世界について（後書き）

ちなみに寮は日向と同じ部屋つてことにしています。男子寮は基本2人部屋で設定しています。

氷室「なんで日向と一緒に部屋？一人でゆっくり寝たいんだけど」

作者「まあまあ。落ち着け」

日向「そうだぞ」

作「日向はかなり喜んでたし」

氷「まさか…日向…ゲイなのか」

日「ちがーよ！…なんで俺が「それじゃあ

氷・作「次回をお楽しみに！」

日「人の話聞け――――！」

Episode 4

オペレーションコントルネード

～作戦会議～

会話文が多くなったしました。
どうしても空氣のなるキャラがでてくる...
基本主人公視点で行きます。

～氷室s.i.d.e～

俺は廊下に横になって寝て、天井を見上げた。

「いい天気だな～。それじゃあ、わっかへ寝るか

俺は横になり、睡眠を始めた。

「氷室君？ 今すぐ本部に来て」

「却下」

ペマ（携帯をきる音）

俺は携帯をきつた。

もつちよつと俺は毎晩がしたいんだよ。

ペマ…（着信音）

「はあ～」

ペマ（携帯にでる音）

「もしも」来なかつた場合ぶつ殺…

ペマ（携帯をきる音）

「はあ～」

ため息を2回もしてしまつた。…行くか。ぶつ殺されたくないし…

俺は校長室へ向かった。

「うーーーす

「おせーーぞーー

藤巻が言った。どうやら俺が一番最後に来たらしく。

「わりいーわりいー

「来たわね

今度はゆりが言った。

「はい、これ。刀と銃よ

「サンキュー」

俺が注文じといった武器をもらひて刀は背中にじよい、銃は懷にしました。

「おひ。刀か。なんで刀にしたん?」

田向が聞いてきた。

「まあ、なんとなくだよ。なんといつか…。刀が好きなんだよ」

「やうか」

「やうじえばゆつ。武器つてどいで作ってんの?」

「ギルドっていう地下で作っているのよ」

「今度お礼でもここに行くわ」

「やう。今度案内するわ」

「とにかく今日の作戦はなんだ?」

藤巻が叫んだ。

「やうね。じゃあ始めましょうか

ゆりが言つと辺りが暗くなり、スクリーンが出され、いかにも作戦会議つて感じになつた。

「今日は氷室君が作戦に慣れてもらいために、いつもやっている簡単な作戦に参加してもいいわ。その頃も… オペレーショントルネード」

「ええい」

「つ～む。ここはでかいのが来たな」

大山、松下五段が言った。

「トルネード…。それってどんな作戦なんだ?」

「生徒から食券を巻き上げる…」

「その巻き上げるかよ…」

思わずツッコんでしまった。
生徒から巻き上げるなんて…

「それ悪するにかつあげだら?」

「まあ、もうね」

「武器や頭数だけそろえてあげの果てにかつあげとま…。あきれ
るぜ」

「貴様。それはゆづべに対する侮辱発言だ。今すぐ撤回しや」

野田がつつかかってきた。

「ひるせえ！ ってかそんな危ないもの振り回すな

「んだとおーーー！」

「まあまあ、落ち着け2人とも。」

「〇〇、野田つち、氷室つち。 reiax」

「さうだよ、野田君、氷室君」

「あさはかなじ……」

日向、TK、大山、椎名がフォローしてくれた。

「我々は数や力で生徒を脅かしたりは決してしない

松下五段が言った。

「続けていいかしら？」

「おひ

「氷室君は武装して所定の位置で待機。天使が来たらその進行を食い止めて。細かい位置はあとで大山君か高松君に確認して」

「あははっ」

「ふつ」

ゆりがそう言つと、大山は俺に手を振り、高松は眼鏡をずらし、力々口つけてきた。

「岩沢さん。今日も頼んだわよ。」

「了解」

「天使が来たら各自発砲。銃声が増援の合図になるから。氷室君、わかつた?」

「ああ」

「作戦開始時刻は1830。オペレーション、スタート……」

こうして俺の初めての作戦が始まった。
びつなるやい……。

作者「いや～。無事4話も終わりましたね～」

田向「やつだね～」

椎名「あさはかなり…」

作「小説書くの難しい…」

田「うひがひ側とこで毎日更新してほしによ。なあ椎名ひか

椎「…」

田「なんかしゃべれよー。」

作「まあまあ。それじゃあ

田・作「次回をお楽しみにー！」

椎「あさはかなり…」

Episode 5 オペレーショントルネード～実行編～（前書き）

オペレーション実行編です

戦闘描写難しい

原作とは違うところがかなりあります。

つてか最初から違つか

Episode 5 オペレーショントルネード ～実行編～

（氷室サイド）

作戦開始30分前

俺は食堂の外で田向と話をしていた。

「やついえば、俺銃の使い方わかんないんだけど」

「銃は「うひー…」うひー撃つー…」

「ああ、なるほど」

俺はすぐに理解した。

「うひー…」「おー、なんで銃口をうひーに向かてる?」

「撃つー。」

バンッ

俺は日向の頭を撃つた。

日向よ……。安らかに眠れ……。

10分後

「フアーラー！？なんで俺を的にする？..」

「いやー。手が滑った

「どうみても確信犯だろ！」

「あー、もつそろそろ時間だからもう行へば

「おいつ。人の話を聞けッ！」

日向を無視し、俺の所定の位置、第二連絡橋へ向かった。

食堂は今、大勢の生徒でにぎわっていた。

「いひら遊佐。岩沢さん、照明と音響の準備出来ました

遊佐は岩沢に電話をしていた。

「解

「よし、入江、ひさ子、関根、いつちょうどー。」

「おおーー。」

氷室 side

俺は第一連絡橋で待機していた。

あーあー。俺もガルデモの演奏聴きたかつたなー。

……暇だからゆりにでも電話しよ。

プルルル

「もしもし、何の用、氷室君？」

「あ……（暇だつたから電話したって言つたら、確実にぶん殴られる。
作戦中だし）えーと……ゆりと話がしたかつたから電話した」

「え… / / / / い、今作戦中よ／／／用もないのに電話してこ
ないで／／／／ 「

「へーい」

ガチャ…（電話をかける音）

やつぱり怒られた…。

（ゆり side）

氷室君作戦中に何用も無いのに電話してきてるのよ。まったく…。
でもわたしと話したくて電話したって…ってなに考えてるのよ私／
／今は作戦に集中しなきや。

（氷室 side）

「ふわ——…

俺はあくびをしていた。暇だな。

「セーで何してるの?」

「ん……うわっ…… 天使じゃん。お、お前こそなにやつてんだよ?」

「今食堂でが大変なことになってるから、それを注意して

「……悪いな。俺はお前をソリソリで足止めするためここにソリで待機して
たんだ」

「…………そり」

「つひ」とで帰ってくれ

俺は銃を構え、天使に撃った。

バンッ

見事腹に命中した。

「よし」

あると…

「Guard Skill」

天使の傷はいつも簡単に治ってしまった。

「ええーーー！ チートじゃんその能力」

天使の能力…するい…

「… Hand Sonic」

あの時のように、両方の手首から刃物がでてきた。けど今回は…俺も武器を持っている。

俺は背中に背負っていた日本刀を抜いた。

「よつと」

「……」

キンッ

俺の刃と天使の刃が交じあつた。

キンッ キンッ キンッ

何度も刃と刃が交じあつた。
以外と動きについていける。
これならなんとかなる訳ないよな…。

日向 side

俺は食堂の前で待機してた。

バンッ

「おい今向こうの方で発砲したぞ」

野田が言った。

「向こうの方って氷室がいる場所じゃん

「これは少し痛い」と、ここで攻められたなー。

「援護しに行くぞ」

俺、野田、TK、松下五段、大山、藤巻で援護しに行つた。

氷室 side)

キンッ キンッ

ああークソ。めんどくせー。早くみんな来いよ。

「おこ、よけろーーー！」

「おひ。ようやく来たか。

「わかつた」

俺はみんなのところに行つた。

「撃て——！」

田向の合図でみんなが撃つた。

「Guard skill」

だが、弾はじき返された。

「チツ……」

「待たせたなー！」

「Get you little kills！」

「「JUちの弱」というをつかれたんじゃねかあーーー？」

「でもまだハンドソーフィクだけだよ

「うーむ」

田向、野田、TK、松下五段、大山、藤巻がかけつけて来てくれた。

「いやー、助かつたよ」

「けどお前けつこうつ余裕そうだつたじやん」

日向が言つてきた。

「んなことねーよ」

「みんな広いところへ行くな」

藤巻が言つた。

松下五段がロケットランチャーを吹っ飛ばし、広い所へ逃げた。

その後、椎名、高松がかけつけてくれた。
けど俺らはおされてた。

俺はゆりに電話をした。

「おこつめりー…まだか?」

「おこつめりー。あんまり回るのよ」

あ…あれた。早くしてくれ…。
腹減った…。

（ゆり side）

その頃食堂は…

ライブは最高潮に達していた。

「やんそり頃合いね…。回せ」

私は遊佐さんに指示をだした。

「回して下せー」

遊佐さんはさらに別の人に対する指示をした。

巨大扇風機が回り始まつた。そして食券が勢いよく舞い上がり、外の方へ飛んでいく。

「とりあえず、作戦は成功ね」

「はい」

遊佐さんは言った。

「氷室 side」

突如紙が食堂から飛んできた。
そして俺はその紙を拾った。

「ああーこれ食券かー。もう何枚か拾つといー」

「氷室。とつとと行くぞ」

日向が言った。

「ひむ」

俺たちは食堂へ向かつた。

食堂にて…

俺はやうと日向と食事することにした。

俺は麻婆豆腐を頼んだ。

「こしてもこの麻婆豆腐やけに赤いな」

「え…氷室君麻婆豆腐にしたのー?」

「う」愁傷さまだ…

二人とも何言つてるんだ?

「まあどりあえずいただきます」

パクッ

「 「…………」 」

「ん…うひ。辛い…けど意外とつまいかも…」

「無理しなくてもいいぞ」

「やうよ」

「本当につまいで。ほれ、一人とも食つてみろ」

俺は麻婆豆腐を蓮華れんげですくい、まずはゆりに差し出した。

「いいわよ別に……」

「ほれあ～ん」

「あ～んじゃないわよ／＼／＼恥ずかしいじゃない／＼／＼

「ゆつづペが照れてる…。これはレアだ！」

「う、うひむせー／＼／＼

「ほれ」

「……じゅあ」

パクッ

「う…辛…けど美味しい…」

「だらー、ほらー。田向も食え」

「じゃあ…」

「辛いほど……たしかにうまい」

「だろ……」

「…………」

そして俺らは食事を終え、俺と口向は寮へ戻った。何故かゆりはずつと黙っていた。

「……してもゆりっぺにあ～んをするなんて。
流石だぜ氷室。ゆりっぺでしてたし」

「さうか？あ～んしけもめずかったか？」

「……鈍感だ」

意味がわからん……。

いついて俺の初めての作戦は終止符を打たれた。

眠いから寝よ……。

（ゆり side）

氷室君にあ～んをされてしまった。少し恥ずかしかったけど……嬉しかった……
また何考えてんだろ私。
…………寝よ。

Episode 5 オペレーション・コントロールネード～実行編～（後書き）

作者「無事オペレーション・コントロールネード編を終えた」
「」

遊佐「ちよつと私の出番が少ないです…」

作「まあやつやーナブキャラだか」

遊「もひと玉番増やしてくだせー」

作「でも…「増やしてくだせー」

作「……考えておきます」

遊「それじゃあ…」

作・遊「次回をお楽しみに」

Episode 6

鬼Jリ (前書き)

更新遅れてしません。
誤字脱字がありましたら、 言つてください。

（氷室^{ヒロシ}）

今俺たち戦線のメンバーは校長室に集合していた。もちろんやつに呼ばれたからである。

「みんな集まつたわね？」

「ああ、んで今日は何をやるんだ？」

藤巻が言った。

「今日は…鬼^ゴの^ノいをやるわよ」

「鬼^ゴの^ノいってあの鬼^ゴの^ノいか？」

「ええ、そうよ。まあこの鬼^ゴの^ノいは氷室君の実力を見るための鬼^ゴの^ノいだから」

「俺の？」

「つてことは普通の鬼^ゴの^ノいとはルールは違つわけですね」

高松が言った。

「その通りよ。まず鬼は逃げてるものにタッチするのではなく、倒すのよ」

「つてことは武器を使つていいのか？」

野田が言った。

「やうやくよ。あ、ちなみに逃げるのは氷室君で他はみんな鬼よ」

「おこ…… ドリフリとだよー?」

「言つたとおりよ。氷室君も攻撃していいわよ。倒された人はその時点でもリタイア。氷室君が私たち全員倒すか、逃げ切れたら、あなたの勝ちよ。逆に氷室君がやられた瞬間私たちの勝ちよ。」

「これただ俺に対するいじめじゃないか!?!」

「貴様。ゆりつペが言つたことを否定するのか?」

野田がハルバードの刃を向けてきて言った。

「どうみても俺のほうが不利だろ!?!」

「んなことどうでもいいんだよ……。」

「落ち着けって。ゆりっぺ。確かに氷室一人はきつくなーか?」

日向がフォローしてくれた。いやー、本当にありがとうございます。

「そうね。じゃあ日向君も逃げる方ね」

「やつぱいわ

「……」の裏切り者――――――――

「悪いにな

「制限時間は3時間よ。逃げれる範囲は……まあ常識の範囲内で。はい氷室君とつと逃げる。5分後にスタートよ」

あーもう、手抜こう。

う…。手を抜くわけにはいかないらしいな。

「ちなみに手を抜くような愚か者は後で地獄を見せるわよ

「それじゃあ…スタート…」

～NO side～

「行つたわね。あんたたち…負けたら一週間断食ね」

「　　」

「ひして地獄の鬼」が始まった。

～氷室sside～

あーもつゆりの野郎…あんな理不尽な鬼「」いやつていたれるか…!!
と言いたいけど、地獄をみたく無いので、とりあえず頑張つてみるか。

ちなみにこれに参加してるのは、ゆり、日向、野田、高松、TK、
松下五段、大山、藤巻、椎名、遊佐の10人である。（俺除く）

「とりあえずテキトーに逃げるか

俺はとりあえずグラウンドに逃げた。

俺は今グラウンドでぶらぶらしていた。
暇だなー。

すると…

「大山じゅん」

「あ…」

大山はポケットからトランシーバーを取り出した。

「氷室君発見。場所はグラウンド」

「やばつ。すまない大山」

「うわーー！」

俺は日本刀を抜き、大山を斬った。

すまない…。そうしている間に藤巻と高松が来た。

「おい、大山がやられたぞーーー！」

「何とこい」とですか

「いやつ……悪ついー」

「大山のかたきだーーー！」

「！」で倒されてください

藤巻は長ドスを、高松は銃を構えた。

「俺…負けんの好きじゃないから…本気だすわ」

「…」

（ゆりside）

私は大山君から報告を受けて、グラウンドへ向かった。
向かうと、大山君はすでにやられていた。

高松君と藤巻君がそこにいた。

…私は見た。

目に見えない速さで彼ら2人を斬つたところを。
私は思わず目を疑つた。

「嘘…？ 彼こんなに強かつたの？」

ある程度の戦闘力はあるとthoughtたけど、まさかここまでとは…
これはかなり期待できる。

とりあえず私はもう少し様子を見ることにした。

大山、藤巻、高松、脱落。

（氷室 side）

俺は今第一連絡橋の下でアップルジュースを飲みながら休んでいた。

「やっぱアップルジュースうまいわ」

その時、俺の飲んでいたアップルジュースが爆発した。多分、銃で

打たれたのだろう。

「そこまでだ……」

「観念するんだな」

「finis!」

「野田、TK、松下五段…。よくも俺のアップルジュースを…」

「悔しかつたら俺らを倒してみろ」

野田がハルバードで俺に斬りかかってきた。

「じゃあ…そいつはめりひさ

俺は野田の攻撃を避け、野田を日本刀で斬った。

「ぐはっ」

「まずは一人

「ぐつ…。法むなTK

「OK

松下五段とトーキーが撃とつとしたが、そのまえに俺が銃を斬った。

「何だと…」

「……」

そして俺は2人を斬った。

「あースッキリした。俺のアップブルジュースをこんなにしたから
こいつなるんだよ」

その時、俺の後ろからクナイがとんできた。
俺はなんとか避けた。

「ここの投げる奴は…椎名しかいないか…」

「氷室…」ひりいでやられてもうつ

「……しゃーないなー」

けど女の子を斬るわけにはいかないな。
……そうだ。

「悪つい椎名」

「……」

俺は椎名の腰後にまわり、日本島の柄^{つか}で頭を打つて氣絶させた。

「本当に悪つい」

俺はこの場を後にした。

野田、TK、松下五段、脱落。

椎名、氣絶中。

俺は屋上に行こうとした。

俺は時間が過ぎるまで、ここで寝よう。
屋上に来てみると、

「あら、氷室さん来ましたね」

「お前は確か…遊佐か」

「はい。直接話すのは初めてだと思います」

「そうだな」

「じゃあ…」」でへたばつてへだわー」

「いやだ」

バンッ

遊佐が銃で撃つてきた。

「あぶねー」

俺は刀を抜き、柄で遊佐を氣絶させた。

「また悪いことしたなー」

「やつだな」

突如日向が現れた。

「お前も俺を……」

「俺はお前の」とを撃ちたくないが…。ひやんとやらないと、ゆりつぺに怒られるからな~」

「俺は……お前の」とを撃つナビ……」

俺は銃を取り出し、日向の「」とを撃つた。

「ぐはっ」

「これで後は…ゆりだけじゃん。もう余裕だな。

「んじゃ、ひとつと終わらせますか…ってなんでこんなとこにアップルジュースが」

屋上の出入口にアップルジュースが置いてあった。

「とりあえずいただきまーす」

アップルジュースを手にすると、突如アップルジュースが大爆発をおこした。

「ぐ…… 眼だつたとせ……」

「ちゅういわね」

「やつぱつゆうか…」

「ええ」

ちくしょー。ここまできて負けたくない。

俺は立ち上がり、刀を抜いた。

「…………。覚悟……」

「ちよつともまだやるの？」

俺はゆりを斬りかかるうとしたが、俺は気を失い、ゆりを押し倒してしまった。

卷之三

「氷室君つたら／＼＼＼＼＼

「…………」

（ゆり side）

私は改めて氷室君の実力を知った。
彼はアホだけど強い奴だとわかった。

でもまさか最後にあんな単純な罠にひっかかるとは…。更に私のことを押し倒すとは…／＼
緊張したー／＼／＼

復活した日向君に見られて、からかわれたので、蜂の巣にしといた。
けど…少し嬉しかった。
なんだらかこの気持ち…。

私以外のメンバーを1週間断食（水分含む）にしたのは、また別の話…。

Episode 6

鬼の口上(後書き)

作者「いやー、ゆうべさん。おまつこですねー」

ゆう「ちよつと何作者までからかってこられるのよ。殺すわよ」

作「誰のおかげでこういつが死んでいるのかなー?」

ゆ「……。次もよろしく頼むわ」

作「ラジャー。つい」とぞ

作・ゆ「次回をお楽しみにー」

Episode 7

天使エリア（前書き）

原作とはかなり違います。

Episode 7 天使エリア

（氷室 side）

俺はいつも通り校長室で作戦会議が行われてた。にしても九日校長何も言わないのか？

「今日の作戦は……天使エリアの侵入よ」

「天使エリア……」

「一体どんなところだらう……。

「……今私たちの弱点はなんだと思う？・氷室君」

「は？えーと……俺以外馬鹿なところ

「惜しいわね。あなたも含め、馬鹿なところよ

「少なくともおまえよりは頭はいい」

「なんですか？……つてそれより……今回は頭がいい彼を作戦に同行させるわ」

「 よりしく

「 イスの後ろから！？」

大山が言つたどおり、ゆりが座つてゐるイスの後ろから現れた。

「 彼はコードネーム竹山君よ」

「 こんな奴が本当に戦力になるのか！？」

「 3 . 14159265358979323846 ...」

「 ぐおー」

「 円周率だと！？」

「 やめてあげて。彼はバカだから」

松下五段と大山が言つた。

野田…。本当にバカなんだな…。

「 竹山君。 よりしく頼むわよ」

「 僕のことはクライストと呼んで下せご」

「 イリーチがコードネームじゃね？」

「台無しだな

俺と日向がツツコんだ。

「生徒が大勢いるとやりづらいから、岩沢さん、今回も頼むわ

「了解」

「天使エリアに侵入するのは…私、竹山君、日向君、松下君、野田君、氷室君。他は天使の動きを止めといて。それじゃあ、作戦開始！」

こうして、作戦が開始された。

現在俺たちは女子寮にいる。

「…よし開いた。いいわよ」

俺たちはとある部屋に入った。

「あの……リリは？」

「リリが天使エリアよ」

「これただの女子の部屋荒らしだる…… やつていいじりととやつち
やいけないことがあるだろ……」

「ゆうべにはむかうのか！？」

「バカは黙つてろ！！」

「んだと……！」

「まあまあ。落ち着けって」

「やうだぞ」

日向と松下五段が止めにかかった。

「「けども……」」
「悪いんだよ……」

「てめーら二人ともうるせー…… 少しは黙つてろ……」

「すまん、ゆうべ」

「てめーの方がうるせーよ」

「ああん！？」

「…………」めぐなせこ

「えー やつぱりパスワードがかかるてる。竹山君、頼んだわ」

「わかりました。後僕のことはクライ「早く」はい……」

竹山はパスワードを解析しはじめた。

「解析完了です」

「よしぃ。よくわかったわ」

「当然です。あと僕のことはクライ「早く怪しいファイルを開けなさい」……わかりました」

ファイルを開くと何やら名簿らしきものがでてきた。

「これは名簿……。ＺＰＣ……いや私たちのもあるわね

「空振りか？」

「んー。竹山君、もうちょっと調べてみて」

「了解です」

ピピピイ…。

突如電話が鳴つた。

「あ、ごめん。私のだわ」

ピイ…

「もしもし?」

「大変です。天使がゆりつぺさんたちの方に向かいました」

「わかつたわ。ありがとう高松君」

ピイ…

「みんな。天使がこちらに向かってるわ。撤収よ」

「了解」

俺たちは天使の部屋をあとにした。

女子寮を出ると、そこには天使がいた。

「うーんで向をしているの?」

「くつ。 もう作戦は終ったよ。 逃げるわよ」

「俺がおどりになる。みんなは早く逃げや」

「氷室君……わかったわ。みんな行くわよ」

「悪ひー

「ありがとよ

「すみません」

「ねまえにしちゃひるじゅねーか

みんな行つたか…

「…………」

「…………すみませんでした——!——」

俺は天使に土下座した。

「勝手にあなたの部屋に忍び込んでしまいましたー」

「…………やつ」

天使は寮に戻つて行つた。
許してもらえたのか?

「まあ……いつか」

俺は本部へ戻つた。

「今回の収穫は……ゼロよ」

「やつですか」

高松が言った。

「なあ。なんで天使の部屋に侵入したん?」

「天使に関する情報収集よ。どうやって神様と連絡をとっているかとか」

「なるほどね」

納得していいのか俺。

こつして本日の作戦も終了した。

なんか疲れたから今日は早く寝よ。

Episode7 天使エリア（後書き）

作者「いやー、今回もなんとか終わりました」

天使「うん。それより少しば私の出番が少ないような気がする」

作「まあ、あくまでメインヒロインはゆりっぺなんで。でもそれなりの絡みは入れていくつもりです。納得した?」

天「……うん」

作「えっと、それじゃあ……」

作・天「次回をお楽しみにー」

Episode 8 潜入

氷室 side)

「よし、作戦決行だ」

「おうひ

俺と日向はある決心をした。
ゆりの部屋に侵入することを。

前回はあんなに女子の部屋に侵入することを否定してたのに何故か
つて？

それは…

「頑張ってモンハンを取り返すぞーーー！」

「おおーーー！」

そう。モンハンを取り返すためである。

昨日、俺、日向、大山、藤巻で作戦会議中なのに、モンハンをやつ
ていた。

案の定、ゆりに見つかった。大山と藤巻は逃れたが、俺と日向の p
spが没収されてしまった。俺たちの唯一の楽しみが奪われたので

ある。

「あの時も少しどいでジンオウガを倒せたのに…」

「やうだな。行こう。俺らの楽しみを取り返しに」

「つして俺と日向は、女子寮へ向かつた。

俺と日向は女子寮の前まできた。

「これバレたら殺されるよな？」

「大丈夫だ。殺されてもまた回復するから」

そもそもうだな。

「よし、行くか」

「おひ」

俺と日向はゆりの部屋へ向かつた。

俺たちは今廊下を歩いていた。

ちなみにこの女子は今学校で授業中である。

「おまえがいじめをやめてくれる？」

「向つて…椎名つばこーっ。」

「椎名ー?」

「ああ。で向をやつてこる?」

「こやつたの…。おつにへりあつて…」

日向が一生懸命説明している。

「さうか。呼び止めて悪かつた

「いじつて」とだ。じゃあなー」

椎名が行つた。

「ふうー。危なかつたー」

「先を急いだ」

「ああ」

「」「今度何してますか」

「うひトイー?」

「今度はトイかー」

「」「とにかく。ひなっち先輩、ひむっち先輩」

「ひむっちで……」

「」「今度何をしてるんですか?まさか私たち女子を襲いに

…

「ちがー!」

「まあ、私に魅力を感じちゃうのはわからなくもないけど…」

「てめーなんかに興味なんてねーよ」

「なんだとーーー。もうこいつへんまみやがれ!ーーー!」

「ああーーー。まみやがれーーー!」

「はいはい、もうここにだら。ユイ、実はな……」

今度は俺が説明した。

「なるほど。ちやんとゆつづけ先輩に許可をもらつてゐるだけですね」

「ああ、やうだ」

「呼び止めてすみませんでしたー。それじゃあ、また

「ああ」

「……行つたか」

「危なかつたー」

「先急いで」

「ああ」

「いいを曲がった先がゆつの部屋か

「ああ、やうだよ」

ちなみに今ゆりは部屋にいない。

藤巻と大山の協力でゆうつを足止めしてもうひとつくる。

「よし、もうすぐだ

「じで句をしているんですか？」

「今度は遊佐かよ

「何男子禁制の女子寮に入っているんですか？ 今すぐ通報します」

「待ってくれ！」これには訳があつて…

俺は一生懸命遊佐に説明した。

「…………わかりました。今回は見逃します」

「ありがとう

「それじゃあ

「じゃあね…………ふうー

「早く行こうぜ氷室

「ああ

俺たちはゆりの部屋を田指した。

「リリがゆりの部屋かー」

「ああ。やうこそねばびつちアドア開ける?俺ピッキングなんてで
きんねーぞ」

「俺ができる」

「せひすがー氷室」

そう。俺は何故かピッキングができた。俺は生前何をしてたやう…。
やつぱり思い出せない…。

俺はゆりのドアを開けた。

「普通部屋だなー」

「田向、お前はどんな部屋想像してたんだよー?」

「向つて…。あつたぞヨウガ

ゆつの机の上にあった。

「よし、さつとどすらからい」

その時、

ペペペペイ…

「悪い。俺の携帯だ」

俺の携帯が鳴った。

携帯を見ると、藤巻からであつた。

「もしもし？」

「大変だ。大山がゆりっぺに脅されて作戦がバレた」

「なにーーー？」

「今ゆりっぺが氷室たちのところへ行つた。早く逃げろー！」

バンッ（ドアが開く音）

「氷室君、日向君。覚悟はできてる？」

「……どうせひら遅かつたらしいな」

「ああ。一回切る」

「あなたたち。勝手に私の部屋に入るとは……。これは、死にたいつて」とかしら?」

「いや俺らすでに死んでるし…」

田向が言つた

「お前だつて天使の部屋に勝手に入つたじやん」

「それとこれとは別よ」

「あわせなか」

「そ」
二三
二三

「すみませんでした――――――」

俺たちは土下座して必死に謝つた。
当然ゆりは許してくれなかつた。

俺たちはボロボロにされ、更に1週間断食された。マジで死にそうだった。まあ、もう死んでるけど…。

Episode 潜入（後書き）

作者「……2人とも大丈夫か？」

氷室・日向「……」

作「……ダメだ」いや。ひとつ恐るべしだな。それじゃ、次回をお楽しみに！」

氷・日「……」

Episode 9 立華 奏

（氷室s.i.d.e）

俺は今食堂で夕食を食べようとしていた。カレーライスを頼み、席を探していた。

「けつこつ混んでるなー」

ほととど空いてる席が無い。

「え？、哪儿に空いてる席があるじゃん」

2人まで座れる席が空いていた。

俺は席に座り、

「んじゃ、 いただきまお」

「混んでるから相席いい？」

「別にいいよ… つて天使さん?」

「……（天使じゃないけど）」

天使が俺の目の前に座ってきた。

「……」

「……」

会話がない…。かなり気まずい。

つてか天使はあの激辛麻婆豆腐を平然と食べてるけど、大丈夫なのか?

「なあ…。辛くないのか?」

「別に…」

「……」

「……」

会話終了…。…どうするか?
よし、

「お前天使って言われてるけど本当の名前はなんていうんだ?」

「……立華 奏」

立華 奏……。あれ……俺この名前なんとなく聞き覚えがある……。なんだからつ……。……ダメだ、思い出せない。

「なあ……。俺と立華って生前とかに会つてたりしてる?」

「……」

「なあ……。やっぱ何か俺の生前のことを知ってる?」

「なあ……立華……。俺の生前のことを知ってるんだが。だつたら教えてくれ……。俺は何者なんだよ……」

俺は思わず立ち上がってしまった。

「……」

「……悪い……」

俺は席に座った。

「……私は確かにあなたの生前のことを知ってる。けどそれは言えない」

「なんで?」

「私はあなた自身で思い出として欲しいの、氷室君」

「あ……俺の名前……」

立華は俺の名前（苗字）を知っていた。
やつぱり俺と立華は何かしらの関係があることは確かだ。

「……わかった。まあ、ゆっくり思い出していくよ」

「うん」

「ヒントくれてありがとな」

「そんなことない。私も早く氷室君の記憶を取り戻して欲しいの」

「やうか

俺は夕食を終え、寮へ戻った。

「俺つて何者だろう。」

次の日

俺はゆりと屋上で話をしていた。

「んで、アハしたんだ、か?」

「いや、なんか最近疲れちゃつてー」

「まあ、ゆうはリーダーだし。本当に偉いよ」

俺はゆうのことを撫でてやつた。

ゆりの顔が赤くなつた。

「ゆりの赤くなつた顔、けつこつかわいいなー」

「なつ／＼／＼

ゆつの顔がますます赤くなつた。

「話を変えでいいか」

「えつ、何?」

「俺つて何者だと思ひつへ.」

「ただのアホ」

「せうじやなく。実は昨日…」

俺は昨日立華との出来事をゆつに話した。

「ふーん。いろんなことがあつたんだ」

「ああ。で、どうすればいい?」

「どうするも何もまあ、ゆつくりでもいいから思ひ出したほうが多い
いんじゃない? 天使さんのためにも」

「そうだな。ありがとう」

「別にいいわよ。そのくらい」

突然、強い風が吹いた。

その風でやうやく、トマトの中が見えそうになつた。ついでに見えたのが、

「見た？」

「見ちゃつた」

「この変態が——／＼／＼／＼

「うれしかった」

俺は屋上から飛び降りて逃げた。
その衝撃で骨が折れた。
まあ、すぐ治るけど。

シテリ Sides

氷室君にパンツ見られた／＼／＼めちゃくちゃ恥ずかしい。

けどかわいいくて言われたときはすつ“こ”いうれしかった。生徒会長と氷室君つてどういう関係かしら？ なんかムカムカする。私、いつの間にか氷室君のことばかり考えている。やっぱり私、氷室君のこと……

氷室 S.ride

俺は今外をぶらぶらしていた。

「おっ、あそこ立ってるのは立華じやん。おーい

「氷室君」

「何してたん？」

「お花の世話」

「そりが、花好きなのか？」

「うん」

「なあ、少し話しない？」

「いいよ」

俺と立華は近づのベンチに座った。

「お前って不思議な能力持つてるよなー」

「うん。確かに特殊な能力。といいつて、なんで敵である私に話かけ
るの？」

「そりゃー俺とお前が何らかの関係があるからじゃね？」

こんな感じで立華と会話をした。

「付き合わせて悪かつたな」

「別にこことよ」

「やうか。じゃあ俺も行くべから

「やう

「じゃあなー

「やう

俺はとりあえず寮へ戻つた。

俺の記憶を思い出す第一歩を踏み出した……はず。

Episode 9 立華 奏（後書き）

やつぱん小説書くの難しい……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5639y/>

Angel Beats! + オリ主 ~Another story~

2011年11月24日19時49分発行